

第6回小中一貫教育懇話会 次第

日 時 平成25年7月25日(木)

19時～

場 所 生駒北小学校 多目的室

1 開会あいさつ

2 協議・意見交流

テーマ:「生駒北小・北中学校における小中一貫校の設置について検討し、懇話会として一定の方向性を出すための会の進め方や取組内容について」

(1) 先進校視察(京都市立大原学院小中学校)について

(2) 「生駒市小中一貫教育のイメージ」について

(3) その他

3 事務連絡等

4 閉会あいさつ

生駒北小中一貫教育のイメージ

懇話会資料

H25. 6. 20

茶釜などの伝統産業に代表される歴史と先端科学に見られる未来が融合する高山地区にある生駒北小学校・生駒北中学校。
小中学校9年間を一貫した教育方針の下で、「伝統」と「先進」をテーマに、地域に学び、確かな学力と豊かな人間性を身に付けた未来を生きる人材の育成を目指します。

市の教育課題（学力学習状況調査等から）

学力、学習意欲の向上 規範意識の醸成
自己表現力の向上 運動能力の向上

生駒北小中学校の状況と課題

児童生徒数の減少 教育情報の発信
人間関係の固定化 校舎の老朽化

保護者や地域の願い

地域の活性化 学校の存続・活性化
国際社会を生きる力の育成 人口の増加

地域の「伝統」と「先進」に基づく魅力ある学校 ～施設一体型小中一貫教育の創造～

特色ある教育課程の編成

小学校6年間、中学校3年間を教育課程の大きなまとまりとして円滑に接続し、子どもの発達段階に応じた指導、少人数を生かした指導、地域コミュニティと連携した特色ある教育活動を行う。

言語、知識、情報、 技術を活用する力

学力補充の取組

—ICTや放課後等を活用した学習の推進

奈良教育大学との連携により学生ボランティアが授業に入り込み個々にアドバイスしたり、放課後や長期休業中中等を活用して学力補充に取り組んだりする。

電子黒板、1人1台のタブレットなど学力向上のためにICTを有効活用する。

9年間の地域学習—地域の伝統文化に学ぶ

9年間の系統的な学習計画により、茶釜づくりなど高山地区の伝統文化にふれ、地域を知り、地域に学ぶことにより、地域を大切にする人材を育成する。



体力・運動能力の向上

—一貫した「体力向上推進プラン」

小中一貫した「体力向上推進プラン」に基づき、9年間を見通し系統的な指導計画を作成し、中学校保健体育の教員と小学校教員が連携して指導するなど体力向上を図る。

高学年から部活動に参加できる体制をつくる。

理数教育の推進 —先端科学にふれる機会の充実

奈良先端科学技術大学院大学との連携の下、理科の楽しさを知り、身近な自然や先端科学に関心をもち学習を推進する。



自らの人生に意 味や目的を与え、 社会の発展に参 加する力

情報活用能力の向上

情報機器の操作ばかりでなく、物事を批判的に考える力、確かな情報に基づいた責任ある行動など情報社会を生きる力を育てる。

国際理解教育、英語教育の充実

—3年生から系統的な英語学習を実施

外国語指導助手（ALT）やわくわくイングリッシュサポーターの活用、中学校英語教員と連携し、英語に慣れ親しむことから中学校英語教育への円滑な接続を図る。

また先端大留学生との交流も推進する。

キャリア教育の推進

—地域の産業に学ぶ

ゲストティーチャーや職場体験の受け入れ事業者の拡大に地域と連携して取り組み、学習の充実を図る。

人間関係の広がり

—小中合同行事等による児童生徒の交流

体育大会や入学式等の行事、部活動を小中合同で実施し、コミュニケーションの場を広げ、豊かな人間関係を構築する。

多様な集団の中で、 人間関係を構築する力

一体型による充実した施設・設備

—学校と地域との交流の拠点

小中学生の交流、地域の方との交流のための多目的室やホール等を設置する。休日にも地域の方が使用できる会議室など、学校と地域の交流の拠点となる場を設定する。

地域コミュニティとの 連携の充実

学校・地域・保護者の三位一体となった取組の推進を図る。学校の組織に地域との窓口となる部を設置し、連携を強化する。

小中教員協働による指導力の向上

9年間を通したカリキュラムにより小中教員が協働して取り組む指導体制を確立する。

中・高学年から、一部の教科で中学校教員による専門的な指導を行い、学力・学習意欲の向上を図る。（算数、理科、音楽、図画工作、外国語活動、体育等）

小中教員が協力しあい生徒指導を充実させる。

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
DIVISION OF THE PHYSICAL SCIENCES
DEPARTMENT OF CHEMISTRY

REPORT OF THE
COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS

PREPARED BY
THE COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS

REPORT OF THE
COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS

REPORT OF THE
COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS

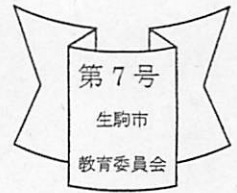
REPORT OF THE
COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS

REPORT OF THE
COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS

REPORT OF THE
COMMISSION ON THE
STRUCTURE OF THE
ATOMIC NUCLEUS
AND THE
PROPERTIES OF
THE ELEMENTS



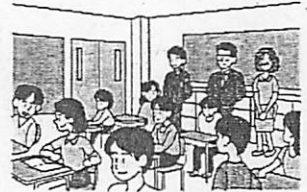
懇話会だより



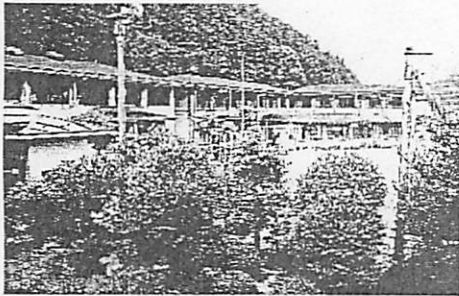
7月4日(木) 先進校視察 京都市左京区 京都大原学院

「日本のふるさとから世界へ！」

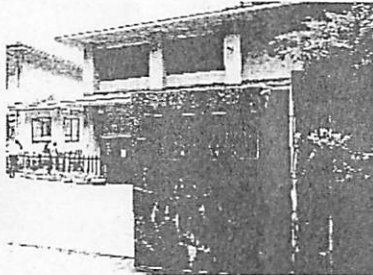
大原のゆとりある心を 自信をもって伝えられる子に！」



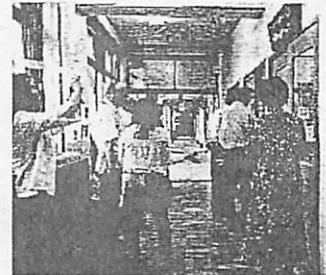
京都市の中心部から北東へ 15 km、周りを山に囲まれた大原は地下鉄「国際会館」駅からバスで 30 分ほどのところにあります。三千院や寂光院、大原女など歴史ある土地に、平成 21 年春、施設一体型小中一貫校「京都大原学院」が開校しました。地域の特性を生かした魅力あるコミュニティスクールの大原学院を 14 名で訪問しました。



<校舎と運動場>



<正門>



<ベビーハウスを見学する参加者>

昭和 50 年代には小学校だけでも 250 名を超える児童がいましたが、現在は小中学校合わせて 85 名(各学年 1 クラス。最も人数が少ない学年は 4 年生で 6 人、最も多いのは 7 年生の 14 人)となっています。大原学院の校長先生や小学校の教頭先生、教務主任へ次のような内容の質問をしました。

「生駒でも生徒数減少を受けて一貫校の協議が始まりました。一貫校が魅力あるものとなり、地域の活性化につながれば、結果として人口増・生徒増につながると期待しています。大原では一貫校が始まってまだ 5 年で、成果を求めるのは早いと思いますが、何か成果は出てきていますか。」



「大原は市街化調整区域となっており、そのために人口が増えません。ここで育った子どもが大人になってもここに住めば子どもの数が増えるのではないのでしょうか。そのために特色ある学校、魅力ある学校になれば、と思っています。今、大原では自治会が中心となり、地域の人口を増やす取組である『さとづくりプラン』の実施を市に陳情しています。『地域のための学校』『学校がなくなれば地域が廃れる』、そんな思いが地域にはいつもあるのです。数年後、小中一貫教育の成果が出、人口も増えることを願っています。」



地域の願いである「若者が自分の子どもを学ばせたいとなるような、魅力ある学校」とはどんな学校かについて、教職員や教育委員会、地域住民が議論を重ねたそうです。「様々な意見をすり合わせることは大変な作業でしたが、子どもたちの明るい笑顔を頼りに乗り越えてきました。」と校長先生は話されました。



<5年生の授業風景>



<職員室>

少人数の中で育った子どもたちにとってはコミュニケーション力が大きな課題となります。このことについては高山地区の保護者の皆さんがとても心配されていることで、「少人数で過ごす利点は何でしょうか？」と参加者が質問しました。

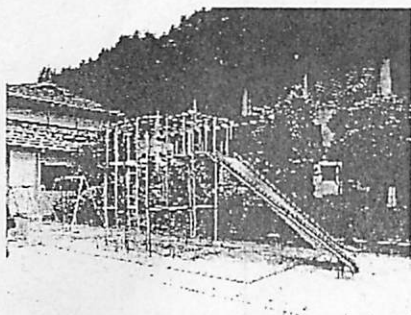


「家庭的雰囲気なのがいいです。生徒指導上の問題は起こった場所・起こった時に解決するようにしています。人数が多い学校ではリーダーにならない子どもが出てきますが、少人数だと全員がリーダーにならなくてはいけません。しかし、これをやりきると自信がつくんです。子どもたちは高校生になって初めて小集団を離れますが、高校を途中でやめる子はいません。」

大原学院では4・3・2制を導入しています。発達段階に合わせて前期（小1～小4）、中期（小5～中1）、後期（中2～中3）の3ブロックに分けてゆるやかな段差を作り、9年間の一貫性を重視した教育に取り組んでいます。また、5年生からは徐々に教科担任制を取り入れ、学級担任制からの緩やかな移行を図ります。

学校への誇りと愛着を持たせ、学校と家庭のけじめをつけるため、中期からは標準服であるブレザーを採用しており、中期はノーネクタイ、後期になるとネクタイ・リボンを着用するそうです（前期は式典時のみ、お揃いのトレーナーを着用）。標準服の着用はブロックごとの一体感の醸成や、子どもたちの自覚を促すことに大変役立っているとのことでした。

大原学院には0歳から6歳までの就学前の子どもたちが過ごす施設（ベビーハウス）もあります。幅広い年代の子どもたちが同じ敷地内で生活することで、「早くあんなふうになりたい」「良い手本になるようがんばろう」とお互いに成長できるのですね。



生駒市ホームページには先進校視察時の議事録要旨を掲載しております。小中一貫教育懇話会のページは以下のとおりです。

<http://www.city.ikoma.lg.jp/kashitsu/15200/03/01.html>

今後の予定は、

・7/25（木）第6回懇話会（生駒北小学校多目的室 19:00～21:00）
で、懇話会は傍聴可能です。

第2回 小中一貫教育先進校視察

議事録 要旨

- 1 日 時 平成 25 年 7 月 4 日(木)
10:00～11:20 説明・質疑応答
11:20～12:00 施設見学
- 2 視察校 京都大原学院（京都市立大原小中学校）
- 3 参加者 14 名
影林保志（生駒北中学校育友会顧問）、正田文敏（打田・高船保護者代表）
藤堂宏子（ひかりが丘自治会会長）、窪田博明（久保自治会顧問）
井上園子（「i どばた会議」共同幹事）、十文字良明（生駒北小学校長）
上西均（生駒北中学校教頭）、柳田富恵（生駒市校園長会長）
富山二郎（生駒北小学校教諭）、武田厚四（生駒北中学校教諭）
事務局（峯島教育総務部長、伊東教育指導課長、藤本教育総務課課長補佐、前田指導主事）
- 4 質疑応答
 - (1) 小規模校なのにテニス部は市内大会で3位という素晴らしい成績だが、部活動はどのように行われているのか。
(回答) 7年生以上が入部する部活動には、ソフトテニス部とバドミントン部といくつかの文化部がある。5年生からは水曜日の30分間と一部土曜日にも活動できる。
 - (2) 少子化や過疎という問題がある中で、どのようにして小中一貫校の設立に至ったのか。
(回答) 小学校は統合、中学校はバスで他校に通学することが明らかになり、地域に学校がなくなるという危機感が住民に広まった。そこで地域の人たちは教育委員会に行き、存続を訴えた。教育委員会は「小中一貫校になれば存続可能である」という回答だった。そこで全国の小中一貫校を調べ、児童生徒数の減少で一貫校になった奈良市田原小中学校に学び、設立に向けて動き出す。今、大原学院では0歳から15歳まで100人が集う。
 - (3) 4・3・2制のブロック制を実施し、あらかじめ想定していなかった事態は発生しなかったか。
(回答) 今までは6年生が学校のリーダーだったが、4年生にリーダーとしての自覚が出てきた。3年生にも「来年は自分たちが」という意識がある。6年生については運動会での応援リーダーをさせたり5年生から9年生までの委員会活動で頑張らせたりするなど、「6年生＝小学校のリーダー」というこれまでの名残を意図的に残している。中期ブロック(5年生～7年生)の指導が難しかった。

(4) コミュニティ・スクールとしての新たな課題は見つかったか。

(回答) 課題ではないが、コミュニティ・スクールとしての機能を果たすべく組織面でも充実してきた。学校が運営について決定し、それを地域が協力するという、従来よくあるような関係ではない。地域住民は「学校に自分たちがいろいろ言っていくことで、学校は変わっていくんだ」という意識を持っている。例えば大原学院には地域が雇用した ALT がいる。1 年生から英語教育をするためである。このように地元からの寄付をどう使うかについて地域住民の思いを取り入れている。修学旅行や部活動の対外試合でのバス借り上げ代金の補助など。

(5) 子どもの数に対して先生の人数が多いように感じるがどうしてなのか。

(回答) 子どもの数ではなく学級数で先生の人数は決まる。1 学級 8 人未満なら複式学級となるが、複式学級にならないよう、児童生徒数が 6 人の学級には講師が加配されている。小学校は学級担任 6 人+教務主任 1 人+教頭 1 人の合計 8 人、中学校は 1 教科 1 人だが、英語と数学の教員を加配されて 2 人ずついる。音楽や美術、技術家庭は非常勤講師である。養護教諭は今年から 1 人になった。

(6) 昭和 62,3 年までは生徒数が増加、その後は減少に転じているが、減少の勢いが激しいのは何か理由があるのか。生駒でも生徒数減少を受けて一貫校の協議が始まった。一貫校が魅力あるものとなり地域の活性化につながれば、結果として人口増・生徒増につながると期待している。大原では一貫校が始まりまだ 5 年で成果を求めるのは早いと思うが、何か成果は出てきているか。

(回答) 大原は市街化調整区域となっており、そのために人口が増えない。ここで育った子供が大人になってもここで住むことになれば子どもの数が増える。そのために特色ある学校、魅力ある学校になればいいのではないかと考えている。御所南小学校がそうだった。今、大原では自治会が中心となり地域の人口を増やす取組である「さとづくりプラン」の実施を市に陳情している。「地域のための学校」「学校がなくなれば地域が廃れる」、そんな思いが地域にはいつもある。数年後、小中一貫校の成果が目に見える形で現れれば、人口も増えるだろう。しかしながら少人数指導、いきとどいた指導が大原学院の特徴だから、生徒数は「微増」がいい。奈良教育大学の小柳教授がそう述べられた（訪問前日に大原学院は奈良教育大学と連携協定を結んでいる）。成果が出るのは 10 年後ぐらいかもしれない。

(7) 特例措置の申請を行う必要があるものはなかったのか。

(回答) 教育課程の変更はしていないので申請は行っていない。一年生からの英語授業は授業時数にカウントしない授業であり、5 年生や 6 年生は 1 授業時間が 45 分ではなく 50 分だが、「補充の時間」としてしている。

(8) 指定校の変更によって入学してきている例はあるか。

(回答) ない。

(9) ノーチャイムで困ることはないか。

(回答) チャイムが鳴らないことで混乱はない。給食開始時間が前期・中期・後期ブロックでずれているが、

前期ブロックの1~4年生は給食準備や食事に時間がかかるので、給食終了は大方3ブロックで同じ時刻になる。チャイムは午前と午後の授業開始時に鳴るだけである。チャイムが鳴らないことにより、子どもたちは時計を見て動くようになった。昼休みの運動場では、誰かが昼休みの終了時刻が迫って教室に戻りかけると、他の子も気づいて遊びをやめる。慣れるのが一番遅かったのが教師だった。

(10) 給食調理員が1名しかいないが、自校式で調理しているのか。

(回答) 急に休んだときのことを考え、プール要員として1人を登録している。児童生徒数120~130人までは給食調理員は1名しか雇用できない。

(11) 特別支援教員の配置はどうなっているのか。

(回答) 特別支援の教員は、児童生徒8人に1人であるが、1年生から9年生までの合計ではなく、あくまで小学校単位、中学校単位でカウントする。

(12) 中学校の教員が専門分野を生かして小学校で授業をすることは多大な効果があると考えている。しかしながら、教員の中には中学校3学年分の授業を行い、なおかつ小学校の授業もしなければならない者もいる。負担になってはいないか。

(回答) 中学校の教諭はベテランが多く、仕事の見通しを持ってやっている。教職員の負担と教育的効果のバランスを考えることが大事である。中学校教師の専門的視点で小学校の子どもを教えるのは効果的だと思う。

(13) 中期ブロック(5~7年生)の授業に中学校の教師が入るときの指導体制や中期ブロックの指導の難しさについて教えていただきたい。

(回答) 中学の先生が教えるときには小学校の教師はT2(教師が複数で授業を行う時、主として全体指導をするのがT1。T2は個別指導等授業の補助をする。)として入る。小学校は単元ごとのテストをするが、7年生からは中間・期末テストを行う。6年生の卒業式は卒業証書をもらう式だという認識でいる。普通なら中学1年生である7年生は中学校で一番年下としてリーダーの上級生についていく立場なのだが、7年生がリーダーとしての自覚を大いに持っているように感じる。そう考えると3ブロック制では中学卒業までに3回、リーダー性を高められる時期がある。ここでは9年生は0歳から15歳までのリーダーである。だから大人の目線で、大人の感覚で物事をとらえて判断する。

(14) 少人数という限られた人間関係で9年間を過ごすことについての保護者の心配があるが、少人数で過ごす利点は何か。

(回答) 家庭的雰囲気なのがいい。生徒指導上の問題は起こった場所・起こった時に解決するようにしている。人数が多い学校ではリーダーにならない子どもが出てくるが、少人数だと全員がリーダーにならなくてはいけない。しかし、これをやりきると自信がつく。子どもたちは高校生になって初めて小集団を離れるが、高校を途中でやめる子はいない。

5 事務連絡 (事務局)

○懇話会の議事録については、今後、参加者に目を通してもらってからホームページに掲載する。

○井上園子氏が就学前の保護者の声を集める「i どばた会議」の共同幹事として懇話会参加者に加わることの了解を得た。